



コスタリカ国草の根技術協力

「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業活動報告」

No. 17

2017.2.23

～2年目を迎えて～

NPO 法人イフパット 研究員 小林沙羅
(現地調整員/生活改善ファシリテーター)

早いものでこの2月でプロジェクトも2年目を迎えました。プロジェクトでは2年目にあたり、新しい現地調整員/生活改善ファシリテーターである、宮崎雅之を迎えました。小林は現地担当としては一旦業務を終了しますが今後、国内からのバックアップまた、短期専門家として引き続きプロジェクトに関わり続ける予定です。小林からのプラビダ最終版として、この1年の所感を振り返ります。赴任当初は初めての家族での海外長期滞在ということもあり、暑さに弱い夫がすぐに体を壊す、雨季には娘のデング熱騒ぎ(結局デング熱ではありませんでした)、幼稚園問題(最初は泣いていましたが、最後は毎日元気に通いました)、仕事上でもプロジェクトのまずは基本的な体制を整えるために必死でした。

プロジェクトのカウンターパートであるオロティナ市長、農村開発庁の所長また、協力者の農牧省本庁のメンバーとは「貧困度が高い入植地で、モノによる援助を期待する住民の自発的な改善をいかに促していくか」について何度も話し合い、また生活改善の理念を実際の活動にどのように落とししていくか一緒に試行錯誤をして来ました。オロティナ市長が、「生活改善アプローチを実践することで、より良い行政官になれる実感がある」と話していたことが印象的でした。直接ともに働いたファシリテーター達には、まず集落の現場に足を運び住民と話す、住民の課題をともに引き出し解決を側面的に支援する、ということもすれば成果が目に見えにくく、数値に表しにくい活動を自分のものにしてもらうために何が出来るかを考える日々でした。この点が一番苦労したと思います。ファシリテーターの自発性にはまだ個人差はありますが、最初は生活改善を理解出来なかった一人のファ

シリテーターはその後、本邦研修に行き日本の経験に触れ、サンタリタとセバディージャ村に通うことで地方行政として今までインフラや食糧をばら撒いているだけではなく、住民の課題解決能力を育成する重要性に気づくようになりました。最初は村に行っても住民とごちない感じでしたが、最後に彼と村でワークショップを実施した際には、今まで会合の場で発言したことがなかった一番大人しい女性の意見を引き出すことに成功しました。

そして何よりも日々の活動の遣り甲斐を感じさせてくれたのが、生活改善グループに参加する村の住民でした。既に前号でご紹介した、入植地から故郷に帰りたいと嘆いていたサンタリタ村のマルジェリスはカマドを改善したその後、大工である夫と協力し少額のお金と廃材を利用して作った快適な家に移り住みました。前に住んでいたのはトタン小屋で床も土で窓もなく、家畜が出入りしていました。今ではセメントの床になり柵に囲まれくつろぐための庭まで出来ました。同じく廃材を利用して小さな家庭菜園も始め、新鮮なセロリやハーブを収穫できるようになりました。「生活改善を通じて少しずつ改善すること、成長することを学んだ。以前は貧しければ何もできないと考えていたのに、人生が180度変わった。」と語り、積極的にグループ活動に参加するようになった彼女は前とは別人のようです。このような小さな意識変容が対象集落で少しずつ起き始めていることにいつも励まされ、今後も確実にその変容を支援していかなければならないと考えています。

また、今までのプラビダには書き残すことが出来なかったのですが、このような変化が生み出された背景には、長野県松川町の協力があります。長野県で生活改良普及員として活躍された米山由子様には日本の生活改善初期からの経験を紹介していただき、村の住民たちにとって「戦後の日本は今の自分達よりも貧しい、自分達でも何かできる」と大きな動機付けとなりました。村の家庭を訪問いただいたことで「米山さんが来たことで、自分たちの活動、そして生活の価値に気づいた」という住民の発言もありました。松川町からは高坂教育長にも教育・子育ての短期専門家としてもご訪問いただき、日本の教育を支える規範や協働の精神は生活改善活動にも大きく関連するところがあり、村の住民も子ども達を家庭の中で教育していくことの重要性を実感したようでした。松川町の深津町長はじめ産業観光課の皆様が本プロジェクトの協力者となって下さり、10日間の本邦研修の受け入れもして下さっています。日本における実際の経験に触れることがファシリテーター及び住民にとって何よりも大きな学びとなっており、活動促進のための意欲向上に繋がっています。

オロティナ市における生活改善のうねりはまだ始まったばかりで、今年1月にはオロティナ市役所の社会政策の一部として5か年計画に生活改善アプローチの促進が明記されました。独自予算を持たないオロティナ市役所が生活改善を通じて、入植地の社会開発を率先するモデルとなれるのか、また関係省庁への生活改善の組織としての定着化、モデル集落では家庭レベルの小さな改善から今後グループとしてどのような展開を迎えるのかプロ

プロジェクトはまさに岐路にあるかと思えます。1年間の皆様からのご協力に感謝するとともに、2年目もどうぞ引き続きご支援、ご指導の程宜しくお願い致します。



写真1：オロティナ市長、市役職員、ファシリテーターのメンバーと。市役所の一員として家族のように受け入れてくれました。



写真2：ファシリテーターのメンバーと。ファシリテーター達が以前からあためてきた計画である、サンタリタ村とセバディージャ村間の初めての経験交換会を帰国前に実施することが出来ました。それぞれの村の住民が自分の言葉で生活改善から得た学びを発表しました。



写真3：経験交換会でサンタリタ村のリーダー、マヌエリータと。グループの女性達がお金を出し合って思い出にTシャツを作ってくれました。マヌエリータは生活改善を学んだことで、シロアリで悩んでいた家を借金をするのではなく、服や洋服にかけていたお金を貯め修復しました。